

連載

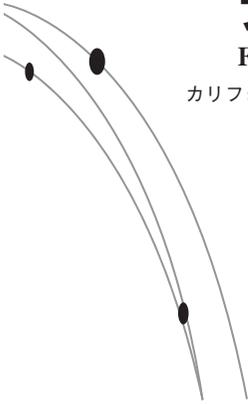
フィールド・アイ

Field Eye

カリフォルニア・アーバインから——②

日本女子大学 原 ひろみ

Hiromi Hara



日本食を通じた交流とフェアな家事分担

昨年4月、カリフォルニア大学アーバイン校 (UCI) に来た直後に、日本で働いているカナダ人研究者から「国内・国外に関係なく、ビジター (客員研究員) はとにかく孤立しやすいから、気をつけて」と饞のメールを受け取った。米国人で同じく日本の大学の教員である彼の妻が、何年か前にサバティカルで米国のとある大学で1年間ビジターをしたことがあるのだが、「まるで囚人のようだった」と話しているとのこと。本務先にいる間は、授業があり、教授会や様々な委員会に出席しなければならないし、オフィスにいる間でも来客があったり、同僚や院生・学生が面会に来たりと、多くの時間を人と過ごす。しかし、在外研究中は、そうしたことがまったくなくなる。そうすると、個室のオフィスを与えられたのはよいが、訪ねてくる人はたまにしかおらず、1日中一人でオフィスに閉じ籠って研究をするしかない。まさに囚人生活である。ネイティブ・スピーカーですらそんな状態になるのだったら、私はどうしたらいいのだろうと途方に暮れたことを思い出す。

しかし、「気をつけて」と言われてもどうしたらよいか分からないし、まあ仮にそういう状況になっても、1年くらいどうってことないだろう、むしろ研究に集中できてよいのではないかと強がってみたりもしたのだが、やはり寂しい。それでも、キッチンやラウンジ、セミナーなどが集まる場所にちょこちょこ顔を出していると、顔見知りができ、知り合いと呼べるレベルになり、ランチやコーヒーブレイクに一緒に行くようになり、徐々にではあるが関係ができてくる。そ

こで思い出したのが、「留学中にたまに同級生と簡単な食事を作って一緒に食べるのが、数少ない楽しみだった」「自宅に人を招待すると、少人数だからじっくり話せるし、それがきっかけで親しくなったりするよ」など、留学や在外研究を経験した人たちの体験談。同じような話を複数の人から聞いたことがある。

前回書いたような事情で、料理道具は揃えてある。食材にも事欠かない。食べることに興味がない人もなかにはいるが、美味しい食事が嫌いな人はいない。特に、日本食は美味しいうえに健康に良いとのことで、カリフォルニアでは大人気。Sushi は当然、Japanese curry, ramen, soba/udon noodle, omusubi (onigiri), green tea, maccha, kombucha, wasabi, yuzu……。もちろん米国人好みにアレンジされていて、私たち日本人が想像するものとはかなり違うのだが、いずれにせよ大人気である。特別な料理を作れるほどの腕前はないので、「日本人の普通の家庭料理を試してみたくない？」と招待する。

これは、思いのほか喜ばれる。そして、私も静かな環境で少人数だったら、なんとか会話に入っていける。渡米直後は会話にでてくる人名・地名等の固有名詞やそもそもの文脈が分からなくて、何を話しているのか全然分からないということが多かったのだが、日本や日本食のことだったら話せることもあるし、ゲストの出身地や国のことを質問すると、彼らも話したいことがたくさんあるので会話が盛り上がる。小さな経験に過ぎないかもしれないが、料理を通じた交流は悪くないと思っている。これから留学や在外研究を予定している方には、簡単な料理で構わないので外国でも入手可能な食材で一、二品作れるようにしておくこと、そしてなによりも遠慮せず、勇気を出して知り合いを自宅に招待してみることをお勧めしたい。

そんなことをしているうちに強く感じるようになったのは、日本人は諸外国の人とくらべて男女の家計内での役割分担意識が強く、実際の役割分担でも男女差がかなり大きいということである。公表データを見ると、日本人男性の家事関連時間は女性の4分の1程度で、日本は韓国やイタリアと並んで男女差が大きい国である。

ペルー人の経済学部のビジターと仲良くなり、よく自宅に招待しあったが、金・土・日に彼女の家で夕食をする場合、料理当番はドイツ人のパートナーであ

る。彼は通勤に車で片道1時間かかるので、月～木の夕食当番は彼女で、それ以外は彼が当番とのこと。彼女の家に行くと、それから料理が始まる。準備万端でゲストを迎える日本人とはこの辺りも違うのだが、「今日は彼の当番だから」というわけで、そのままキッチン横のダイニングで私たちはワインでも飲もうと言い始める。最初は違和感があり、なにか手伝えることはないかとキッチンに行き彼に尋ねたりしていたのだが、「いいから、いいから。座っていて」と彼も言う。人は易きに流れやすいもので、そのうち気にもならなくなり、最近ではおしゃべりを楽しみながら、今日はなにを作ってくれるのかしらと料理の完成を心待ちにするようになっている。

ビジターだけでなく、UCIはファカルティも国籍が多様なのだが、イギリス人の男性准教授を夕食に招待したときのこと。別のファカルティと一緒に招待したので、日にちを決めてから招待したのだが、うかつにも彼に子どもが生まれたばかりであることを知らなかった。実は10週間前に子どもが生まれたところで、その日は学部の仕事の関係で1日オフィスにいなければならない。日中ずっと妻に子どもの面倒をまかせ、さらに夜もというのはtoo muchで頼みづらい、今回は遠慮させてほしいとのこと。断られてとてもがっかりしたのだが、それ以上に彼の妻への思いやりに感動した。

米国は国としてみると育児に係る政策に関しては後進国で、たとえば有給の育児休業を認める企業は少ない。州や企業によって違いは大きいのだが、UC全体に育児期間中の授業減免措置が導入されている（ただし、給与もその分減る）。ともに経済学部で准教授として働いている米国人夫婦がいるのだが、二人目の子どもを春休み中に出産予定だという。「出産したら仕事との両立はどうするの?」と尋ねたところ、夫婦そろって授業減免を選択することのこと。同じく、台湾人の女性助教授も、今年の夏にボーイフレンドがアイオワの大学からUCIに転職してくるといふ。遠距離恋愛で大変そうだったので、本当によかった、これで結婚、出産と次のステップの話になるんじゃないの、なんていう他愛ない会話の中で、「(授業減免措置を選択するのが)私だけなんてありえない!! 当然、彼にも選択させる」と彼女らしからぬ強い口調で言う。い

ずれも大学教員の話なので、職種特殊性のある話かもしれないが、カップルのどちらかがより多く家事や育児を負担したり、キャリアで不利益を被るというのはありえないことのようなのである。

また話は変わるが、学部の公式行事は土日は当然、平日も夕方以降に行われることはない。たとえば、セミナーの時間は15時30分～17時で、子どものお迎えが必要な教員でもなんとか参加できるようになっている。新入生の歓迎会やクリスマス・パーティなど各クォーターに少なくとも一度は懇親会が開かれるが、これも夕方以降の開催ということはなく、午後の時間帯に開かれる。

労働経済学では、労働市場における男女差に関する研究はずっと以前から盛んで、最近の国際学会でもジェンダー・ギャップのセッション数が多いだけでなく、各セッションの参加者数も多く、盛況なことが多い。実験的フレームワークの研究から新しい発見が次々となされるのと同時に、人的資本量の男女差や労働市場における差別といった古典的な議論から、非柔軟的な働き方が評価されやすい労働市場システムの課題 (Goldin 2014, Cortés and Pan 2018, forthcoming 等) や child penalty へと論点も拡がり、研究は加速度的に発展している。このような労働市場における観察が重要であることに間違いはないが、当然、家計における役割分担の在り方も労働市場参加の重要な規定要因である。日本でも家計内でフェアな役割分担が実現するとよいと思うし、夕方や土日にできるだけ仕事をいれないよう取り組んでいくことも大切になっていると思う。

参考文献

Cortés, Patricia and Jessica Pan (2018) "When Time Binds: Returns to Working Long Hours and the Gender Wage Gap among the Highly Skilled," forthcoming in *Journal of Labor Economics*.

Goldin, Claudia (2014) "A Grand Gender Convergence: Its Last Chapter," *American Economic Review*, 104 (4), pp. 1091-1119.

はら・ひろみ 日本女子大学家政学部准教授。最近の論文に、「The Gender Wage Gap across the Wage Distribution in Japan: Within- and Between- Establishment Effects,」 forthcoming in *Labour Economics*. 労働経済学専攻。